

中村舞斗

さん

●NPO法人虐待どっとネット 代表理事

もう、誰にもあのときの自分と同じような思いをしてほしくない

「虐待を受けた子どものAYA世代（思春期および若年成人）の支援環境を構築する」というテーマを掲げ、虐待どっとネットを立ち上げた中村舞斗さん。この組織の立ち上げには、虐待サバイバーとして多くの社会の壁にぶつかり、もがきながら生きてきた自らの実体験が投影されている。その生い立ちから、虐待どっとネットの設立・運営に至るまでの経緯や思いを話してもらった。

●取材・文……白井美樹（ライター）

幼少期に虐待を受け 思春期にはネグレクトに遭う

中村さんが幼少期を過ごしたのは、お母さんがシングルマザーとなって戻った実家だった。祖母と叔母3人と一緒に生活。その家で虐待を受け続けたのだという。「母は朝から夜遅くまで働き、家で顔を合わせることはほとんどありませんでした。母がにかけている間に、僕が虐待を受けていることなど、全く知らなかったようです」

「しつけ」と称した虐待は小学生の間ずっと続くが、中村さんにとってはそれが当たり前。でも、何か変だなとも感じていた。そして中学3年生のとき、ついに自分の中で限界が訪れる。暴力を振るわれている事実をお母さんに告げて助けを求めたのだ。「母は怒って、僕を連れて家を出て2人で暮らし始めました。ところが母はそれまで家のことを一切やったことがなく、母親業が全くできない人でした。今度はネグレクトが始まってしまったのです」

高校に入学したものの、お母さんが何日も家を空けることも多く、まともに食事もとれない日々。学校で話すと、児童相談所が介入することになった。しかし、通っていた高校が他県だったことなどもあり、児童養護施設には入所できなかった。家に帰ると、児童相談所の介入にショックを受けたお母さんに「一緒に死のう」と包丁を向けられ、恐怖から思わず殴ってしまったという。そして家には警察が来て、中村さんは精神科病院に入院となった。

精神科病院を転々としたが 高校に入り直し20歳で卒業

入院中、自分の話はなかなか聴いてもらえなかったという。「2年間ほど、精神科病院を転々としてました。たいていの病院は重い疾患で長年入院している患者さんばかりで、その中に若者

がボンと投げ込まれている感じでした。周囲との関わりもなく、まさに日本の精神医療の闇を見た気がします。でも最後にたどり着いた病院で、やっと人間的に扱ってもらうことができました。おかげで徐々に人の心を取り戻すことができたと思います」

いくつ目かの病院の退院時、帰る場所として自立援助ホームが選択肢として上が

ったが、精神疾患の既往歴があるため、入所させてもらえずやむなく自宅に帰還。その頃にはすでに高校は中退していたので、アルバイトをしなが

看護大学に入学するも フラッシュバックが起こる

就職し、進学資金を貯蓄した中村さんは、22歳のときに念願かなって看護大学に入学。初めて自分で手にした成功体験だと思いと、とても誇らしい気持ちになれたという。友達ともうまく付き合うことができ、最初の1年はすごく楽しかったそうだ。

「ところが2年生になると授業の内容がどんどん専門的になってきて、児童心理や母性、さらには虐待のことなどを学ぶようになります。精神的に不安定になりました」

「コミュニケーションもとれなくなりました」

体調を崩しがちになり、アルバイトにも通えない状態に陥った。当時はアルバイト



Profile

●なかむら・まいと●

1989年生まれ。大阪市出身。幼少期からの自らの虐待体験などから、自分と同じような目に遭ってほしくないというAYA世代を対象にした支援環境を構築するため2020年に任意団体「虐待どっとネット」を設立。翌2021年にはNPO法人として認められる。大学生でも生活保護受給をと呼びかける署名活動を行い政府へ提出。これを受け2022年1月には全国に先駆け横須賀市が独自の支援制度を設けた。

●虐待どっとネット <https://gyakutai.net/kihu/>

で得た収入で学費や生活費を賄っていたため、2年生後期の授業料を払うタイミングで、究極の選択を迫られることになる。

「手元のお金があれば半年は生きられる。でも、授業料を払ってしまえば生活が成り立たなくなる。当時関わってくれていた人に相談すると『生活保護を受けられるのでは』と提案された。何とか助けてほしい一心で役所に向き『今だけ生活保護を受けられませんか？』と尋ねると『大学はぜいたく品です』と冷たく突き放されてしまったのです。そこからはしばらく記憶がなく、気がつけば病院のベッドの上でした」

初めて助けを求めた手を振り払われたことへのショックで、自ら命を絶とうとしてしまったのだという。入院することになり、大学も退学せざるを得なくなった。

「でも、結果的にはその入院からその後の適切な治療につながる事ができました。トラウマ治療も受けられるようになり、回復への道筋が見えるようになったのです」

それまでは全て自分のせいだと思っていたことが、トラウマのせいだと思えるようになり、それを機に人とのつながりが持てるようになった。そのときのトラウマ治療には2年の月日と医療費を要したが、治療

はいまもなお続いているという。

難病を抱えながら就職した後 虐待どつとネットの活動へ

その後中村さんは、再び困難に直面する。平成28年に難病が発覚し、寝たきりになってしまったのだ。

「20歳くらいからずっと体が痛かったので何度も病院に行ったのですが、既往歴や虐待歴からくるストレスが原因だと言われるばかり。でも、体を起こせないうらいに症状が悪化したので、どう考えてもストレスのせいではないと思い、線維筋痛症の専門医で診てもらったりしましたが、最終的には関節症性乾癩かんせつという診断が下りました」

難治性の病気で、最初はなかなかよくならなかったが、あるとき自分に合う薬が見つかり少しずつ改善していった。そうなることも広告収入を得るようになったという。コソコソとこの仕事を続け、電動車椅子を手入れし、ハローワークに行けるようになった。そこで運よく医療系の人材会社の求人があり、就職することができた。

「働いてみると、落ち着いた環境で、とて

として、もうワンクッションおけるような

関係性があつたらいいなと思いました。医療関係者や支援者といった枠がなく、かつ、持続的で永続的なつながりが望ましいもの。そう考えると、その関係性って『友達』じゃないかなと思ったのです」

虐待を受けた子どもが、友達のように何でも屈託なく相談ができて、生きづらさを抱えながら社会とつながっていきけるようになるコミュニティ。虐待どつとネットの立ち上げ時は中村さん一人だったが、その後徐々にスタッフも増え、令和3年にはNPO法人格も取得した。

シャインマスクットがきっかけ で多くの人とつながるよう

NPO法人になれば、寄付を活動費として運用できる。しかし、ただ寄付をしてもらうことに心苦しさを感じていたという。それを払拭してくれたのは、なんと「シャインマスクット」だった。

「ある日仕事で疲れた帰りに初めてシャインマスクットを買って食べ、こんなにおいしいものが世の中にあつたのかと驚きました。食べ終わると、またすぐに食べたくなります。来る日も来る日も『シャインマスクット

ト食べたい』とSNSでつぶやいていたら

『私も食べたい』などたくさんさんの反響があり、多くの人とつながれるようになりました。寄付金にマスクットを組み合わせたら、みんなもハッピーになれるかもしれない」

将来的に認定NPO法人になれば、寄付をした人への税金控除もできるようになる。虐待に関係なくマスクットが欲しいという人たちともつながり、いずれはアメリカのパーマネンシー・パクトのように虐待サバイバーと支援者がつながり続けるような仕組みも作りたいと考えているそうだ。

医療機関につなげるケースなど 保健師さんの協力を

虐待どつとネットでは、現在どんなことを目指しているのだろう。

「安心安全な環境を手に入れるために、虐待を受けた人の人生に伴走していくようなサポートが絶対に必要だと思います。その中のひとつとして、誰でもトラウマ治療を受けられる社会を作るための、働きかけをしていかなければと考えています」

相談者の話を聞くと、複雑な課題が絡み合った内容が多く、せっかく治療につながったと思ってもその先で二次被害に遭う

もいい会社でした。でも、いかんせん、これまで荒波ばかりを乗り越えてきた僕としては、あまりにも居心地がよすぎて、このままでもいいのかな、という気持ちが頭をもたげてきました。そして、30歳の節目に会社を辞めて、令和2年に『虐待どつとネット』を立ち上げたのです」

虐待どつとネットには、「もう二度と誰にも自分と同じような思いをしてほしくない」という中村さんの強い願いが込められている。虐待の後遺症の治療に長い年月を費やしてきた中で、何度も壁にぶつかり、打ちのめされてきた。虐待を受けた子どもに手を差し伸べるからこそ、中村さんが求めていた道だったのだ。

「治療の回復の過程で、どうしても医療関係者や支援者としつつながりを持てない時期があることに気がつき、『僕に関わるのは仕事だからだろう』と思うと、とても寂しく感じました。しかも退院後にいきなり社会に出なきゃいけないんです。これっておかしくないですか。いきなり人間関係を構築しないとイケなくなるというのは、僕の場合にはすごくハードルが高くてしんどかったのです。

そこで、社会に出る前に、その準備期間

ケースも多いのだという。

「どこにもつながれず、ウチを見つけて連絡してくる人も少なくありません。どうやって医療や行政につなぐかという健康課題にぶつかることも多いので、ぜひ保健師さんにもつながってほしいと思います」

